



特別賞 丸善株式会社賞

書評 山田朗, 渡辺賢二, 齋藤一晴著

『登戸研究所から考える戦争と平和』(芙蓉書房出版 2011年)
(和泉開架 395/6//W ほか)

文学部 4年 柳井孝太

戦後 68 年が経過し、戦争は遠い昔の出来事になりつつある。アジア・太平洋戦争についての知識はあっても、現実感がなく、どこか他人事のように感じてしまう人も多いのではないだろうか。そんな人に手に取ってほしいのがこの本である。これは、「登戸研究所」(正式名称:第九陸軍技術研究所)で行われた研究に焦点を当てながら、戦争の本質について考えさせてくれる 1 冊である。

「登戸研究所」の遺構は、明治大学生田キャンパス(神奈川県川崎市多摩区)の敷地内に残り、現在では「明治大学平和教育登戸研究所資料館」として整備され、一般に公開されている。これは旧日本軍の研究施設をそのまま保存・活用した唯一の事例であり、ここでは戦争の記憶を間近に感じることが出来る。この本を読めば、資料館を実際に訪れているような感覚を味わうことができるだろう。日本人が行った戦争の真実を目の前に突き付けられ、自らの歴史認識を根底から覆されるかもしれない。

登戸研究所は、約 11 万坪(東京ドーム 9 個分)の敷地に 100 棟を越す建物を擁していた。膨大な予算が投入され、全国から優れた研究者が多数動員された。最盛期には 1000 名もの人々がこの研究所で働いていたという。この研究所では、「秘密戦」を実施するための様々な研究・開発が行われていた。「秘密戦」とは一体何なのだろうか。この本では以下のように定義している。「<秘密戦>とは防諜(スパイ防止)・諜報(スパイ活動)・謀略(攪乱・破壊工作)・宣伝(戦時プロパガンダ)を構成要素とした、通常は歴史の表舞台に現れてこない<裏側の戦争>・<水面下の戦争>である。」今日の言葉で言えば、「情報戦」である。戦争には必ず付随するが、歴史にはほとんど記録されることはない。そんな「秘密戦」の全貌が、一般市民や高校生の調査、登戸研究所関係者の協力、大学関係者の尽力によって今日保存されているのである。

今回は、特に注目すべき三つの研究について触れてみたい。まず一つ目は「風船爆弾」である。風船爆弾と聞くと、幼稚なものを想像する人が多いかもしれないが、それは大きな間違いである。風船爆弾は大型の気球で、世界で初めて実用化された大陸間横断兵器であり、約 1000 発が北米大陸に到達したというから驚きである。

二つ目は穀物を枯死させ、家畜を殺傷する細菌・ウイルス等の「生物兵器」や対人用の「毒薬」である。開発過程では日本軍占領地や満州国において、捕虜や囚人を使った人体実験や散布実験が行われた。

三つ目は「偽札」である。インフレーションによる経済の混乱・弱体化を狙い、蒋介石政権の紙幣が大量に偽造された。日本軍の物資購入にも利用されたという。他にもスパイが使用する小型爆弾やカメラ等、多種多様な兵器がこの研究所で開発・製造されたのである。

この本を読むと、科学技術が戦争に利用される中で、倫理観や人間性が次第に失われていく過程を実感することができる。過去の歴史を直視し、同じ過ちを繰り返さない為にもこの本を読むべきではないだろうか。そして、資料館に足を運べば、戦争の記憶を継承できるに違いない。